

「相談事例を研究発表する利点」

相談事例を研究発表する（あるいは他の人と相談事例について議論する）利点には、どんなものがあるでしょうか。

1つには（浦上先生も以前お書きになっていますが）「仲間をつくる」ことができます。同じような技法を用いている実践家同士、あるいは興味深い実践を行っている実践家と知りあいになることができます。情報・意見交換や質疑応答、これらが研究発表大会の場を離れても行うことができるようになります。ですから大会の口頭発表やポスター発表では質問・コメントしてくれた方と積極的に名刺交換することで、人脈が増えていくこととなります。大会後に一言でもメールを送っておけば、次に会った時にもスムーズに会話できるかもしれません。大会時の懇親会や、学会の研修会等に参加するのも方法です。

もう1つには「(事例あるいは研究の) 悩みを解決する」ことができます。例えばなかなか決断できない生徒・学生の相談事例について、「皆さんはどう工夫されていますか？」と聴衆に聞くことができます。同じように生徒・学生相談を行っている実践家も多いことから「私も悩んでいる」「私はこうしている」などのコメントがもらえることと思います。実は事例発表というのは「僕って研究者としてこんなにすごいんだよ」「僕の相談、上手いでしょ」という自慢の場ばかりではなく、「こんなことで苦労してませんか？」「こういう時どうしていますか？」という情報・意見交換の場でもあるのです。相談事例を研究発表することで「自分のやり方が批判・否定されるのでは」と心配をされる方もいらっしゃるかもしれませんが（そういうことがないとは言えませんが）、個人的には仲間やアドバイスが得られるメリットのほうが大きいように感じています。当たっていない批判や否定は採用しなければいいのですし、当たっている批判や否定は真摯に受け入れる必要があります。

なお上記のような「仲間をつくる」「悩みを解決する」ことは、研究発表をしないまでも「大会に行って、研究発表をしている人に声をかける」ことでもある程度実現可能です。学会は全国各地で開催されるので、特に遠い開催地の場合には参加する時間も費用も大変だと思いますが、「観光がてら」「息抜きに」とは申せませんが）実践のブラッシュアップあるいは違った側面からの理解・把握に、ぜひ研究発表を活用していただければ、と思います。研究発表に自信がない方は、研究推進委員会の先生が相談に乗ってくださると思いますし、個別の研究発表者にお声がけいただいてアドバイスを得る方法もあるかもしれません。全ての実践家が研究者である必要はありませんが、自らの実践をブラッシュアップするに当たって「自らの実践を纏める」「人の実践と比較する」のも重要な経験と思っています。

（秋田県立大学 渡部昌平）